

日本との出会い

一九五一年の九月二十日ごろ（注一）、グロータース神父は神宮外苑の絵画館の地下にあった国立国語研究所（以下「国研」と略）の所長室で柴田武（敬称略）と対面していた。グロータースは交通事情もまだ良くない中、任地の兵庫県豊岡の教会からはるばる東京にやってきたのだった。

日本の学問にとってエポックメイキングな日はそうそうないものだが、この日は日本の言語地理学にとって記念すべきものとなった。柴田は所長の西尾実と岩淵悦太郎部長の仲立ちがあったとは言え、当時全く無名でしかも日本の大学で教えてもいない、どこの馬の骨とも知れない外国人の学問を認め、以後半世紀近くの長きにわたる親交をグロータースと結んだのである。

残念なことにこの日にどんな対話がおこなわれたか、その内容についての記録はない。柴田によれば、来日間もないグロータースとは片言混じりの英語で話をしたとのことだが、話の主題は言語地理学をめぐってのものだったのだろうか。

ところで、言語地理学とは何か。一言で言うと地図上である物やことを表す語形をその語形を答えた地点に貼り付けることによってその語形のたどった歴史を知る学問である。こう書いてしまうと身も蓋もないようだが、言語地理学には大きな学問になる可能性があり、そのことは数年後明らかになる。

この会見の四年後、グロータースは世田谷区の松原教会に赴任し、国研にも出入りするようになって、非常勤研究員として机もあたえられるのである。そして、『日本言語地図』（一九六六～一九七五）の企画が始まるのだが、当然のことながらグロータースはそこに加わっている。グロータースが誇らしげに書いているように、「クルーケの創始し、オランダとベルギー北部では普通に行われている地点番号システムを用いた」（注二）。これは六けたあるいは八けたの数字で地点の位置を表すもので、ドイツやフランスのように地名を使わないやり方である。一種の座標のようなものなので、この数字だけで地点の位置を指定できるし、同じシステムを使っていればほかの調査との間でもデータを共通化できる。

ついでに言えば『方言文法全国地図』（一九八九～二〇〇六）にもグロータースは関わっており、日本を代表する全国的な言語地図の両方に名前を残しているのである。

『日本言語地図』の調査と平行して一九五七年から一九六一年まで、柴田武、徳川宗賢、馬瀬良雄（一九六一年の調査のみ参加）と新潟県糸魚川地方で言語地理学的調査を行う。この調査と調査結果の地図化はグロータースが持ち込んだオランダ系の言語地理学の方法論によって行われた。

糸魚川調査から日本の近代的な言語地理学が始まった。この調査から多くの論文が生ま

れ、そこで語形の伝播がどのように行われるか、また語形のたどった歴史をどのように推定するかなどの問題が解き明かされた。言語地理学という新しい学問の威力を全国の研究者に知らしめたのである。

グロータースがいなければ、日本の言語地理学は今のような姿にはならなかったかもしれない。いやな話だが、日本の学問が欧米に範を求めるとき、ヨーロッパであれば、英独仏にまず目が行き、オランダ、ベルギーのような小国には一顧だにしないものだからである。

それに、言語学史的な理解として言語地理学はドイツのヴェンカー、フランスのジリエロンによって創始されたものだと考えられているのだから、独仏のどちらかを手本とするほうがずっと自然である。ところが、実際には方法論的に優れているのはオランダ系の言語地理学なのである。日本の言語地理学はグロータースの持ち込んだ方法論のもとで独自の発展をとげ、大きな花を咲かせた。その意味でグロータースは大恩人であると言える。

ところでグロータースとは何者なのだろうか。一言では表せない彼の多面性を知る手がかりとして、日本に来るまでの足取りをたどって見ることにしよう。

日本に来るまでのグロータース

グロータースは、一九一一年（本人は好んで「明治四四年生まれ」と言っていた）ベルギーのルーヴェンに生まれた。ベルギーはオランダ語とフランス語とドイツ語を公用語とする多言語国家であり、グロータース自身もオランダ語とフランス語のバイリンガルとして育った。

著書のなかで印象的なエピソードがある。

幼いとき、フランス語の母方の祖母と話すときはフランス語で、オランダ語の父方の祖母と話すときはオランダ語で話した。両方の祖母が同席したとき、顔の向きを変えるだけで言語が自動的に切り替わったという。

グロータースの父ルドヴィクはルーヴェン大学の教授で言語地理学を研究していた。オランダ語とフランス語の完璧なバイリンガルだったのみならず、ドイツ語と英語にも堪能だったという（注四）。

ルドヴィクは標準オランダ語も話したが、グロータースの知らないオランダ語方言を話し、その方言はグロータースには理解できなかったという。グロータースは幼くして一つの言語にいくつも方言があることを体験したことになる。

グロータース一族の家系図がある。この家系図の普通と違っている点は、成員が使用する言語が記されていることにある。グロータース家は多産な一族で、兄弟も甥姪も多いが、その大部分が複数の言語を使用する。一族の何人かが集まったときには、そのときどきでどの言語を使うかで小さな言語紛争が勃発することもあるのだそうだ。グロータース家は

ベルギーの多言語状況をさらに複雑にしたような言語的混沌となっている。

グロータースは人がいろいろな言語といろいろな方言を話すことが当たり前の社会で育ち、生涯のあいだに二言語にとどまらない多くの言語を操るポリグロット（多言語話者）として生きることになる。彼の言語観はこのような環境のもとで形作られた。彼が異文化社会に抵抗なく飛び込んだのも、言語学者になったのもこのような背景を抜きにして考えられない。もちろん、バイリンガルがすべて言語学者になるわけでもないし、ルドヴィク家庭教育を受けたほかの兄弟に言語学者はいないのだが。

十二歳の時、イエスの招きを感じた。「わたしをまだ知らない国に行って、わたしを知らせたらどうか」。単純に聖職者になろうとしたのでないところがグロータースのグロータースたるゆえんである。この年にして未知の国へのあこがれを持ち、最終的にはそれを実現させたのである。

十九歳でイエズス会修道会に入会し、聖職者になるための教育を受ける。大学には行かなかったが、イエズス会で三年、淳心会（スクート会）でさらに三年教育を受けている。しかも、淳心会修道院時代にはルヴェン大学の父の「オランダ語方言研究室」にも出入りを許され、言語地理学の研究を始めた。また、このときは中国での布教のため中国語も本格的に学んだ。

グロータースの受けた教育は当時のヨーロッパでは普通のことだが、ギリシアラテンの教養を基礎としたものだった。今では絶滅した感のある、古き良きヨーロッパの正統的な教養人と言える。

一九三九年二十八歳のとき中国に渡る。赴任したのは中国北部の大同だったが、そこは当時日本軍の占領地域だった。布教のために大同の方言も習得した。

大同では、民間宗教に関する民俗学的な研究や言語地理学の研究を始め、精力的に論文を発表する。やがて、日本軍の敗色が濃くなってくると外国人は北京の収容所に集められたが、グロータースは北京原人の発見にも関わった古人類学者にして聖職者のテイヤール・ド・シャルダンの知己を得て、定期的にテイヤールの哲学の指導を受けていた。

戦争が終わり、グロータースは北京の輔仁大学教授に任命され、方言地理学を講じたが、一九四八年ベルギーに帰国を余儀なくされる。おりしも国民党が共産党との抗争で徐々に利を失っていきさなかのことだった。

中国の夢破れたグロータースが次に目指したのは、同じ漢字の国日本だった。一九五〇年日本に到着し、姫路で日本語を学んでから翌年に兵庫県豊岡に赴任する。グロータースは四十になっていた。

柴田と初めて顔を合わせるまでに、これだけのことがあったのである。

方言学者としてのグロータース

前述のようにグロータースは言語地理学を日本に移植した大恩人である。先に述べた地

点番号システム、そして語形を図形の記号に置き換えて地図に貼り付ける（実際にはスタンプを使った）やりかたはグロータースが父ルドヴィクから習い覚えたものだった。独仏の言語地理学では、語形はその発音の表記そのままを地図に貼り付けるやり方が普通である。記号を使うと語形の分布が非常に分かりやすい形で目に飛び込んでくるが、発音表記ではそうはいかない。

今考えるとグロータースが独自にもたらしたと言えるのは、個々のアイディアもさることながら、言語地理学実践に必要な総体としてのノウハウだったのではないかと思われる。戦前の日本の言語地理学は通信調査が主体であり、現地で面接調査をしてデータを収集し、それを地図化してそこから新しい結論（語形の歴史）を得るという一連の流れを一人で体験した研究者はいなかった。グロータースはそのような研究者として柴田の前に現れ、柴田の知己を得たのである。

柴田と徳川宗賢、そして馬瀬良雄は三度にわたる糸魚川調査でグロータースのノウハウを吸収し、自分のものにして次々に研究成果を発表し、言語地理学はめざましい発展をとげていく。

グロータースは自分でも論文を発表したが、都立大、上智、法政、清泉、天理大学などで教え、若い研究者を育てた。上智大では学生と一緒に千葉県で言語地理学調査を行っている。グロータースの言語地理学者としての業績は『日本の方言地理学のために』（一九七六）にまとめられているが、そのなかでも「千葉県アクセントの言語地理学的研究」（『国語学』三七、一九五九）を柴田は特に大きな業績としてあげている。

グロータースは精力的に論文や著作を発表した。グロータースの言うところによれば、「発表すべきものがあるのにそれをしないのは傲慢なのだ」とのことだった（注4）。

言語学者としてのグロータースのもっとも多産の時期は六十歳ぐらいまでだと思われる。グロータースは自分のオリジナルの論文を精力的に発表するだけでなく、日本の方言学の紹介をフランス語で執筆し、ルーヴェンの方言学センターから発行されている雑誌”*Orbis*”に寄稿した。ときには馬瀬の論文をフランス語に翻訳することもあった。また、海外の学会に出席して英語で発表を行った。この時期はある意味では、現在よりも日本の方言研究がヨーロッパに知られていたかもしれない。

一方で、ジリエロン、ハルト、コセリウ、などの言語地理学に関する著作を柴田や佐々木英樹、大川泰子らとの協力のもとに日本語に翻訳し、日本の学会に紹介した。日本語への翻訳は、最晩年まで続けられた。独仏語からの翻訳が多かったのは、英語であれば日本の方言学者も独力で読むことができ、わざわざ翻訳するまでもないと考えたからだろう。

グロータースは日本の方言研究にとって江戸時代の出島のような存在だったと言えるかもしれない。日本の方言研究が欧米に知られることも、外国の方言研究の方法論を我々が知ることも同じように重要である。そうしたなかでグロータースが果たした役割は非常に大きい。

翻訳についてはもう一つ付け加えるべきことがある。国立国語研究所の方言関係の文献

の英語で書かれた部分にはグロータースの手になるものである。これは『日本言語地図』も『方言文法全国地図』も同じである。

さらに柴田武の『糸魚川言語地図』（一九八八～一九九五）の大量の英文解説もグロータースの翻訳による。柴田によれば、柴田の原稿とグロータースの翻訳のやりとりは郵便で行われ、グロータースからの便りを柴田は「ラブレター」と呼んでいたとのことである。

聖職者と言語学者のはざままで

これまで述べたようにグロータースは聖職者として日本に赴任したが、方言学者としての仕事は決して片手間のものではなかった。言語学者としてのキャリアは聖職者としてのそれと同じくらい長い。グロータースは聖職者が学問を究めることに葛藤を感じていた。

その葛藤に一つの解答を与えたのが、北京で知遇を得たティヤール・ド・シャルダンだった。すこし長くなるが引用する。

「ところで、ティヤールはどんな精神的活動も、そして精神自体も、神の存在なくしてはありえないと考えていた。だから学問における精神の進歩、すなわち精神の幅と領域を広げるとは、神の国を広げることと同じなのである。そしてすべてのものが進化によって神に向かっている。彼の有名なモットーに従えば、『上に向かって昇るものはすべて収斂する』したがって学者生活と司祭生活とが両立するかどうかということではなくて、むしろ学問のレベルが高くなればなるほど、神に向かっている度合いもそれだけ高くなる。心理とは神の別名である。

こうしたティヤールの考え方が、どんなに新しい方向づけを私にもたらしてくれたか、またそれが精神的にも宗教的にも、どんなに私を解放してくれたか、どれだけ繰り返し言っても言い過ぎることはない。」

グロータースはティヤールを恩師として心から敬愛し続けた。東京でティヤール・ド・シャルダン研究会を主宰していたほどである。

一九七五年春の日本方言研究会は大谷女子大学で開催されたが、そのときに行われたシンポジウムは「われわれはどうして方言を研究するのか」という題のもと、柴田が司会を務めた。グロータースはパネリストの一人として次のように発言した。

『『地球の研究者』であるキリスト教徒の精神と心情にとって、『上のものへ』の礼拝と、『前方のものへ』の信仰の間にあるのは、衝突ではなく、すばらしい共鳴なのである。／わたしにとって科学研究は方言研究であり、それが宗教活動の一つになっている。』

グロータースなりに思考を深めてたどりついた結論だと思われる。

愛の人グロータース

筆者は一九七六年に国立国語研究所員となり、グロータースと親しく接する機会に恵ま

れた。これからあとは、筆者のそうした体験も交えた話になる。

筆者の思い出の中にあるグロータースは、言語地図を描いていけばご機嫌で、ふだんも陽気に笑っていることが多い。トーンの高い声でおしゃべりし、ときどきいたずらっぽくウインクする。パイプをくゆらし、お酒はびっくりするほど強い。(過度に禁欲的でない教団なので許されていた)

神父というものは、謹厳実直で冗談も言わないものだと勝手に想像している人もいるかもしれない。ところがグロータースはそのような期待を完全に裏切る人だった。リーダーズダイジェストという今は廃刊になった雑誌のことを話題にして、「あれは英語の勉強にはいいですね」と筆者が言ったことがある。それに対する返事がふるっていた。

「英語はいいんだが、あれは説教臭くていけない」

神父が「説教」という言葉を否定的な意味で使うなど自己否定のようなものではないかと、心底驚いたものである。神父というのは神の代理人として上からものを言うものだと思っていたが、グロータースはどうもそうではないらしい。

グロータースは偏見なしにいいものを見つけそれを愛することができる人だった。国研の研究補助員だった白沢宏枝は渋谷の寄席に案内されたことがある。白沢は寄席ははじめてだったが、グロータースはすっかり慣れた様子で落語を楽しんでいた。それだけでなく、つぼをはずさずに大きな声で笑うものだから周囲から好奇の視線が集中して隣に座っていた白沢は困惑した。

言語調査で会った人と話をするのも好きだったが、旅先で土地の人と話をするのも好きだった。夏休みには自転車で東北一周旅行のような大旅行を何度かした。最後には、膝の関節が磨り減って歩行が不自由になるくらいだった。

グロータースは日本人も日本の文化も大好きだった。日本の食べ物で食べられないものは見たことがない。でも、単なる「親日家」と形容することには抵抗を感じる。そんな表面的なものでなく、「日本人になりたい」と言うぐらいに日本好きだったが、それは彼の心の深いところに根ざしたものだだった。

たくさんの人に慕われていたからだと思うが、交友関係も広がった。声楽家の金内馨子さんの一門で作る馨門会の名誉会長にもなっていた。恐らく、外国語の歌曲の発音や意味について助言を求められたのがきっかけだと思うのだが、「メイヨカイチョウと言っても『名誉怪鳥』なんですよ」とは本人の弁だった。叙勲とか古希とかのグロータースのお祝いの会の席上では馨門会のコーラスが花を添えたものだだった。

グロータースの思想の根底には、人間を大事にしたい、人間の自由と自発性は何物にも代えられないもので尊重すべきものだという思いがあった。だから、方言の話者が発明した新しい語形を見つけると大喜びした。

本人から一度も言葉として聞いたことはなかったが、グロータースに接していると「人生は悪いものではないよ。人生を人を愛しなさい」と言われているように感じたものだ。そんな考え方もあるのかと心が軽くなったりした。それはいろいろな機会にグロータース

を見知ることになった人たちに共通のことだったに違いない。

柴田は「この方法（言語地理学のこと）の思想的基盤—大地に根をおろしてけなげに生きる、名もない人々への愛と共感—については全く意識することがなかった。それらについて我々は神父から学んだのだった」（「言語地理学者グロータース神父を悼む」から）と書いているが、愛の人グロータースは生き方においても学問においても一貫していたのだった。

語学の達人

グロータースのことで忘れてはならないのが語学のことだろう。ネイティブだったオランダ語やフランス語はともかくとして、それ以外の言語を驚くべき早さで身につけ、実用に使っていた。日本語は四十代間近で学習し、天に召されるまで主に使った。この年齢で新しい言語を学ぶのは大変な困難がある。日本語は決して流暢とは言えなかったが、自分の意志も思想も問題なく伝えることができた。

それだけでなく、日本語の読み書きもできた。言語学の論文を難なく読むことができたし、難しい漢字も書くことができた。日本語が流暢なヨーロッパ系の外国人は最近では珍しくないが、読み書きができる人は本当に少ない。四十歳近くになって学習した日本語の読み書きのレベルがこれほど高い人を筆者はほかに見たことがない。

グロータースは中国での布教のために中国語を学習していたが、そのときにカレンダーの裏に漢字を四十字書いて、覚えたらその紙を捨てるようにしていた。日本に来たときは必要な漢字をすべて覚えていたが、漢字の読みは新たに学習した。言語学者なので、大同方言と北京方言と日本の漢字音の対応関係は把握しており、そこから日本語での漢字の音読みは見当をつけることができたから、少しは楽をしたかもしれない。（注5）

筆者は何かのうちに、グロータースが漢字の一つ一つを康熙字典の番号で覚えているということを知って驚いたことがある。康熙字典は四万七千字を収録しているのだが、すべての字を番号で覚えていたのだろうか。もし天国に電話ができれば、今すぐにでも聞いて確かめたいことである。

英語は中国語と同じ時期に習得し、ドイツ語は日本に来る前に習得したらしい。おそらくオランダ語話者にとって、系統が近い英語やドイツ語は学習のたやすい言語なのだろう。グロータースは英語で日本の方言研究を紹介することもあったし、国際学会で英語で講演をすることもあった。ドイツ語は一番使う機会が少ない言語だったようだ。

また、イエズス会時代はラテン語で会話をしていた。だから、生涯に使用した言語の数は中国の大同方言も入れると八ということになる。ほかに書き言葉としては古典ギリシア語、イタリア、スペイン語も読んで理解することができた。

いくつもの言語の間を行き来することができたグロータースでなければ書けなかった本が『誤訳』（一九六七）である。当時としては取り上げられることが珍しかった誤訳の実例

を題材にした本だが、この中にときどき現れる語学に関する自伝的なエピソードがとても興味深い。実を言えば、筆者はグロータース本人にお会いするずっと前に『誤訳』を読んでいたもので、初めてという気がしなかったくらいである。

『誤訳』は言語学的視点や文化的宗教的な理解が正しい翻訳に不可欠であることを主張した点で、凡百の類書とは一線を画している。ヨーロッパの教養人であり、言語学者であり、宗教人でもあったグロータースにして初めて書けた本ではないかと思う。

グロータースの友人達

糸魚川調査を一緒に行った柴田、徳川とは終生かわらぬ友情を交わした。グロータースは教団の命令でベルギーに帰されるのではないかと柴田は心配していたが、本人が望んでいない以上帰国が命じられることはなかった。確かに、日本に家族はいなかったが、その代わりにかけがえのない友人がいた。

はたから見て、三人の仲の良さはうらやましいほどのものだった。でも、三人の付き合い方は決してべたべたしたものではなかった。「君子の交わりは水のごとく淡し」の言葉そのままだった。お互いに心の深い部分で分かり合っていたのだと思う。

柴田とは、グロータースの書いた英語から日本語にと、柴田の日本語から英語にとという二方向の翻訳を最後のころまでしていた。翻訳というよりはもっと複雑な共同作業だった。たとえば、『誤訳』は、「著者（グロータース）が英語でタイプし、それを訳者（柴田）が日本語へ訳し、できた訳文を著者が目を通し、問題になるところは徹底的に討論して、邦訳の定稿を作る」というプロセスだった（注六）。もとの原稿と定稿は内容的に異なっている可能性があるが、著者が書きたかったことが読みやすく正しい日本語になっていることを尊重した結果である。『誤訳』の表紙には柴田の名前はグロータースとともに著者の位置に印刷されているが、柴田の書いた「あとがき」では「訳者」となっている。

『糸魚川言語地図』では二人の役割は逆転しているが、同じようなプロセスで日本語から英語に翻訳が行われた。このような翻訳の仕方はあまり聞いたことがないが、二人が相手のことをよく理解し、認め合っていたからこそ可能だったのに違いない。

一般向けの著作も含め、グロータースが日本語で書いたものの多くは柴田の翻訳による。分かりやすく、まぎれがなく、すっきりした文体である。それは柴田の文章ではあるが、一方でグロータースの話す日本語もこのような曇りのない明快なものだったと思い出される。

一九九九年、グロータースを病床に見舞った徳川が急死し、それからしばらくしてグロータースも世を去った。その八年後に柴田も二人の後を追った。

二〇一一年の今年はグロータースの生誕百年だった。生前の彼を知る人は年々少なくなっている。元気だったときのかのの人に接した一人として記録を残しておくべくこの稿を記した。

注一 以下の記述は『それでもやっぱり日本人になりたい』(W.A.グロータース、一九九九)、
「言語地理学者グロータース神父を悼む」(柴田武、『国語学』一九九、一九九九)「W.A.
グロータース神父と言語地理学」(柴田武、『方言地理学の課題』二〇〇二)に大いに拠っ
ている。また、『方言地理学の課題』の馬瀬によるまえがきにもグロータースの功績が簡潔
かつ的確に述べられている。

ところで、この出会いの年は『それでもやっぱり日本人になりたい』で一九五五年にな
っており、柴田の書いたものでは一九五四となっている。ここでは日付も含め一九九二年
のグロータースの八十のお祝いの席上での柴田と徳川の発言によった。『方言地理学の課
題』の年譜(佐々木英樹作成)にも一九五一となっている。

注二 「Japanese Dialectology」『Current Trends in Linguistics』II、Mouton 一九六七
による。

注三 『Orbis』の追悼記事による。

注四 徳川からの伝聞による。

注五 逆に、対応の知識が邪魔をして「閨門(こうもん)」をケツモンと間違ったりするこ
ともあった。

注六 決定稿ができるもとの英文原稿は捨ててしまう(『誤訳』のあとがきによる)ので、
普通の意味での翻訳とは違っている。

追記

この小文は 2011 年奇しくもグロータース生誕 100 年の年の『月刊日本語学』11 月号に
「言語学者列伝」のシリーズの一つとして掲載されたものです。

このあと、グロータースさん(自分の恩師であるグロータースさん、柴田先生を呼び捨て
にするのは気持ちが悪いのでここではこのように呼ばさせていただきます)についていろ
いろ調べる機会があり、判明したことがいくつかありました。

まず、1951 年にどうして創設間もない国語研究所(以下国研と略)を訪ねたかですが、
ルーバン大学の言語センター(グロータースさんのお父様のルドヴィクさんが創設した方
言センターがもとになっている)から 1952 年に刊行されたジャーナルの Orbis の巻 1-1 で
は西尾実所長がフランス語で国研の紹介を書き、1-2 でグロータースさんは国研の 24 時間
調査の紹介や、日本の方言学の紹介を行っています。おそらく、西尾さんの文はグロータ
ースさんの翻訳によるものでしょう。

『日本文化のオモテとウラ』によれば、グロータースさんは来日してすぐに京都大学の

小川環樹さんの研究会に出席したり、英語学者の榎垣実さん（関西弁の研究者でもあった）と知り合ったりしていたそうです。このあたりから国研のことを知り、榎垣さんからの紹介状を持って **Orbis** の取材のために国研を訪ねたのではないのでしょうか。最初から柴田先生を目指していたのではないような気がします。

1953年6月の『言語生活』6号では、野元菊雄・柴田武訳で「外国人の見た日本語（一）『グロータース氏の意見』」が掲載されます。1951年の出会いのあと、手紙のやりとりがずっと続いていたことが想像されます。『言語生活』の当時の編集長は柴田先生だったので「この企画だったら第一弾はグロータースさんに頼もう」となったのではないのでしょうか。このあと、1955年にグロータースさんが東京の松原教会に赴任して交流・交友が本格化します。

1956年の柴田先生のヨーロッパ出張では、柴田先生がグロータース家を足がかりにして、ルーベン大学の方言センターで当地の学者と議論したりしたことが『日本の方言』から分かりますが、もちろングロータースさんからの手厚い紹介があったのでしょう。『日本の方言』にはグロータースさんの御父君ルドヴィク教授との会話も記されていますが、ルドヴィクさんは同年急逝されます。ヨーロッパ行きがあと1年遅かったら、ルドヴィクさんとの出会いもかなわなかったのです。

ルドヴィクさんはベルギーのオランダ語地域の方言地理学を創始した偉い方でした（**Orbis**）。グロータースさんはあまり家族の自慢をしない人だったので、そんな話は一度も聞いたことがありません。ただ、御父君を尊敬していたことは次のようなことでもわかります。

「ベルギーでは還暦ではなく65のお祝いをする」ということで、65歳のときに国語学会にあわせて静岡でお祝いをしたことがあります。最近になって、ルドヴィクさんが60のとき弟子たちがお祝いをしようとしたら断り、65のときやっとお祝いができたという話を知りました。ルドヴィクさんは控えめなお人柄だったそうですが、グロータースさんは父親がしなかった60のお祝いを息子がするのはよくないと思ったのでしょうか。少なくとも、ベルギーで60のお祝いをしないということはないのはわかりました。

柴田先生とグロータースさんの交流については、糸魚川研究室略して糸研の話を抜きにはできません。このことについて書かれたものを見たことがないので、最後にこれだけ書きます。

それはJR新大久保駅の近くのマンションの一室でした。ここで、柴田先生とグロータースさんは晩年まで糸魚川の言語地図を描き、二人だけで検討会をしていたのでしょう。ここでの何十年もの研究の成果があつた『糸魚川言語地図』に結実したのです。

糸研には井上史雄さん、永瀬治郎さん、三石泰子さんも行ったことがあるようです。私はこの三人から別々に糸研のことを聞いています。学生にとって道場のようなところだったのででしょうか。

私は真田信治さん、下野雅昭さんと奄美大島の言語地図の検討会のためにここに何度か

足を運びました。当然のことながらグロータースさんは留守なのですが、グロータースさんの机もあってその場にはいないグロータースさんの存在を強く感じる空間でした。